

白山ふるさと文学賞

第十一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生3・4年 作文の部 最優秀賞

「わたしのしよらいのゆめ」

蕪城小学校三年 森田 都琶

わたしのおじいちゃんは、さんふ人科のお医しゃさんで、たくさんのおいさんのおなかから赤ちゃんを生むお手つだいをした、えらいお医しゃさんでした。

もちろんわたしも、おじいちゃんにお母さんのおなかの中から取り出してもらいました。

おじいちゃんはいつも、やさしくて思いやりがあつて、人を助けたいという気持ちがあふれていました。

でもおじいちゃんが、今の時だいではなおせないほどにおもいびょう気にかかつてしまいました。そして今年の四月、とうとうなくなつてしまいました。

わたしははじめは、おじいちゃんのびょう気がそんなにひどいものだと思いませんでした。いずれなおつて、またお医しゃさんの仕事にもどるのだと思つていました。

びょう気になる前の元気なころのおじいちゃんは、すぐく活発で体を動かすことが大すきでした。年をとつてもべんきょうをして、いろいろなことにちようせんしてがんばつていました。わたしは、「本当にすごいおじいちゃんだなあ。」

いつも思つていました。

おじいちゃんとは、いっしょにキントレをしたり、本を読んだりしていたことが心にのこつています。

そんなおじいちゃんの体がだんだん動かなくなつていき、一人で歩くこともできなくなりました。体を動かすことが大すきだったおじいちゃんが、自分で体を動かすことができなくなるのは本当につらいことだろうと思ひました。だけど、びょういんのリハビリの人が来てくれて、体をマッサージしたり、動かしてくれたりして、うれしかったのではないかと思ひます。

びょう気がすすむと、おじいちゃんは体が動かせなくなり、そしてだんだんごはんも食べられなくなつて、お話をすることもできなくな

つていきました。そんなおじいちゃんのすがたを見ていてわたしは、どうしてあげたらいいのかわからず不安な気持ちになつていきました。だけど私が、

「おじいちゃん!!」

と話しかけると、「ニコツ」とえ顔になつてくれて、わたしのことをわかつてくれているんだと思つと、うれしかったです。

びょう気になつてだんだん弱つていくおじいちゃんを見て、わたしは心に決めました。しょうらいおじいちゃんのようなお医しゃさんになつて、びょう気でくるしんでいる人たちを助けてあげたいと。

お医しゃさんになるには、たくさんたくさんべんきょうをして、すぐく頭がよくならないといけないから、わたしは、がんばつてべんきょうをします。

だけどわたしは思ひます。お医しゃさんは頭がよいだけではダメだと。一番大切なのはかんじやさんによりそつてあげることだと。

人はだれでもびょう気になると不安な気持ちになると思ひます。びょう気になつた本人も、家族の人たちも、とても不安になります。

そんな時、お医しゃさんがやさしくせつしてくれないと、もつと不安な気持ちになります。

わたしは、どんなかんじやさんにもやさしくよりそうことができるお医しゃさんになり、おじいちゃんのような今の世の中ではなおすことができないびょう気もおせるような、りつばなお医しゃさんになりたいと思ひます。

天国にいますおじいちゃんが、わたしのしょうらいのゆめを知つたら、きつとおうえんしてくれと思ひます。そして、がんばつて、がんばつてゆめをかなえることができたなら、ぜつたいによるこんでくれと思ひます。

人のために一生けんめいはたらいて、力をつくしていたおじいちゃんを、わたしはそんけいしています。わたしは、おじいちゃんをこえ

るようなお医しゃさんになれるようにがんばります!!

